



## 復活節第4主日 (ヨハネ 10:11-18)

私たちキリスト者は命を置いて生きる者

復活節第4主日、与えられた福音朗読でイエスは何度も「命を捨てる」という言葉を繰り返します。その中でも特に目を引くのは「わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる」(10・18)この言葉です。イエスのこの言葉が当てはまるのはどんな場合なのかを考えてみましょう。同じく私たちも、どんな場合なら「命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる」のか考えてみましょう。

昨年12月に韓国で親子旅行をして以来、親の顔も見に行っていないのは親不孝だと考え、日曜日の女性の会総会を終えてから新上五島町鯛之浦の実家に帰ろうと思います。「実家に帰らせていただきます。」田平教会の献堂百周年に事情で母親は参加できないようなので、これまでの取り組みとか、当日計画していることとか、記念誌のこと、施設整備のことなどを話してこようと思います。

さて福音朗読、イエスが言われる「命を捨てる」という言い方ですが、日本語訳では「命を捨てる」となっていますが、もとのギリシャ語に近い言い方をすると「命を置く」と訳したほうが良いようです。ただ、日本語で「命を置く」というと、「財布をテーブルに置く」くらいの意味合いに受け取られかねないので、イエスの意図していることを汲んで「命を捨てる」と訳しました。

「命を置く」でも、十分説明すればなぜこの言葉が使われているかは分かります。だれも命を捨ててはいけないわけで、イエスもそれはよく分かっていました。命を、完全に守ることのできる方に託す。そんな意味で、イエスは「命を置く」と言われたのです。

羊飼いであるイエスにとって、委ねられた羊を命がけで守ることは当然の務めでした。自分の命惜しさに、羊を置き去りにして逃げることは到底考えられませんでした。けれども、命は捨てるべきものではありません。そこでイエスは、父である神に命を置くことを考えたわけです。完全に命を守ることのできるお方に託して、復活によって命を取り戻すことができることをご存じだったのでした。

御父への信頼のもとで、イエスが命を置くこと。この場合「わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる」というイエスの言葉は説明がつきます。イエスはわたしたちの救いのために、御父への信頼のもと、命を置いてくださったのです。

イエスが命を置いてくださったこと、イエスが命を捨ててくださったことは、イエスご自身のわざに終わらず、私たちの模範でもありました。私たちもイエスのわざを模範として、命を置く必要があるし、命を置くことができるのです。

ただし、条件は変わりません。命は捨ててはいけないのです。完全に命を守ることのできる方に、命を置くのでなければなりません。そのような場面がわたしたちの日常生活にあるのでしょうか。

一つだけ、条件に当てはまる場面があります。それはこのミサ、私たちが礼拝するご聖体のイエスに命を置くのであれば、イエスはわたしたちの命完全に守ることのできるお方ですから、「命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる」と言えると思います。

では私たちが命を捨てるとしたら、どのように実行するのでしょうか。それは、私たちがミサにあずかって聖体を拝領し、次にミサにあずかる時まで、この祭壇に命を置くことで実行できます。ミサを終えると社会のそれぞれの場所に実を置くことになります。一人ひとりが、社会の荒波にもまれ、ある時は傷つくかもしれません。けれども私たちは命をこの祭壇に置いていったので、次にミサに来ることで、いつでも命を受けることができます。

このようにして、私たちの命を完全に守ることのできる方に命を置いて生きるならば、私たちは安全です。どのような困難に遭遇しても、仮にこの世の命を落とすことになっても、私たちはまことのいのちを神に置いて生きているので、その神がわたしたちに命を返してくださるのです。今日、一人のお子さんが洗礼を受けます。洗礼はもともとは、洗礼を希望する人が洗礼を授ける人から水に沈められて引き上げられる形で行われていました。それは、生まれ持ったの罪の傾きに死んで、神が与えてくださる命に新たに生きるためでした。今ここで、私たちキリスト者は神に命を置いて生きる者であると聞きました。今日の洗礼式を通して、あらためて聖パウロがローマの信徒への手紙で呼びかけているように、「わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。」(14・7-8)このような生き方でありたいと思います。

この子は洗礼を受け、神の子となり、教会の一員となります。ご両親はお子さんが成長する中で、「わたしたちは自分で自分の命を守って生きているのではなくて、イエス・キリストに自分の命を委ねて生きているのよ」と教えてくだされば幸いです。

それでは洗礼式に移りましょう。